

 書評

 松下正明, 中谷陽二, 加藤敏, 大野裕, 神庭重信編
精神医学文献事典

山内俊雄

大変おもしろい発想によって作られた本である。

「序」によれば、「精神医学および関連諸分野に関わる基本的な重要文献を選び、斯界の専門家に執筆をお願いし、それぞれの精神医学の歴史における意義や影響を解説したものである。」しかもそれは、「単に解説のみにとどまらない。歴史的な興味からだけでなく、また精神医学における古典の紹介だけでなく、現代に生き、種々の分野で精神医学と関わっている執筆者たちが、その古典をどのように受けとめ、それを自らの活動にどのように生かそうとしているかの表現でもある。古典と現代との対話を通してこそ、これからの精神医学の発展が期待されるからである。」と述べられている。

このような観点から選ばれた 760 点以上の主として著書が、331 名の執筆者によって解説・記述されている。取り上げられた著書あるいは論文は、精神医学に関係した基礎的なものから、臨床、あるいは行動科学、社会学、哲学ときわめて広範な領域にわたっている。そこに取り上げられているものは必ずしも古典とは限らず、比較的新しいものも掲載されている。

中には、自分がかつて読んだことのある著作についての解説もあり、執筆者がどのようにその本を評価し、どこに意義を求めているかを知るのが楽しい。また、名前は知っているがまだ読んだことのないものも数多くあり、内容についての紹介を読み、興味をそえられることも少なくない。紹介された著作を直接読んでみたい人には、原著や邦訳の紹介もあるので、手にする手がかりとなる。もちろんあまりにも古くて手に入れることが困難なものもあるが、それでも紹介文を読む楽しみが削がれることはない。この本を見る楽しみのもう一つは、誰が、どのような

本について執筆し、紹介しているかという点である。どのようにしてそれぞれの著作が選ばれ、取り上げられたかは詳らかではないが、中には執筆者の手によって選択されたのではないかと推測されるものもある。そのような観点で見ると、なるほど、この執筆者ならこの本を選ぶであろうと納得するものもあり、執筆者自身の興味や指向性に思いを至す楽しみもある。

この本は「事典」と銘打っており、言葉を調べる「辞典」や「字典」とは異なり、読む楽しみが加わっている。そのことは別の言い方をすれば、ものを調べるためにこの本を利用することよりも、眺めながら、読みながら、楽しむ要素が強い。その意味からすれば、冒頭に、取り上げた著書名の一覧と解説執筆者名を載せてもらえると、著書を選ぶ楽しみが増す。末尾に「著作名索引」がついているが、これはあくまでも索引であって、読んでみようという項目の選択にはあまり意欲をそそられない。同じように、誰がその本について解説を書いているか、場合によっては誰がどんな著作を選んだか、ということもこの本から得られる楽しみであるから、単なる「執筆者一覧」の掲載ではなく、ごく簡単な執筆者紹介があっても良いように思う。

この本は「事典」以上に精神医学の文献をとおして、精神医学の方向性やここに登場する執筆者たちの意識や指向性までも読みとることのできる興味深い本である。精神医学の領域だけでなく、その関連領域の人たち、これから勉強しようとする人たちも折に触れて眺めて、読んでみるべき本であろう。

(埼玉医科大学神経精神科)

● A5 606頁 2003 本体12,000円 弘文堂刊